

主 論 文 内 容 要 旨

※整理番号		(ふりがな) 氏 名	かわにし けんご 河西 謙吾
博士論文題目	Relationship Between Gliding and Lateral Femoral Pain in Patients With Trochanteric Fracture (大腿骨転子部骨折後の大腿外側部痛と滑走性の関係)		
<p>1. 目的 本研究の目的は大腿骨転子部骨折後における荷重時の大腿外側部痛と組織間の滑走性の関係を調査することである。</p> <p>2. 方法 大腿骨転子部骨折後に大腿外側部痛を有し、回復期リハビリテーション病棟へ入棟中の 23 例を対象とした。調査時期は術後約 3 週目（初期）と退院前の術後約 11 週目（最終）とし、調査項目は基本属性として年齢、性別、骨折型、初期評価までの期間、入院期間を調査した。加えてメインアウトカムは、大腿外側部における組織間の滑走性、大腿外側部痛（安静時痛・圧痛・伸張時痛・収縮時痛・荷重時痛）を調査した。荷重時における大腿外側部痛が NRS4 以下を疼痛中等度群（n=10）、NRS5 以上を疼痛重度群（n=13）の 2 群に分類、その上で基本属性である年齢、性別、骨折型、初期評価までの期間、入院期間の 2 群比較を Mann-Whitney <i>U</i> test と chi-square test を用いて比較した。次いで、メインアウトカムである大腿外側部痛と組織間の滑走性の 2 群間比較は、初期と最終のそれぞれの時期で Mann-Whitney <i>U</i> test を用いた。また、組織間の滑走性と大腿外側部痛の改善度（最終から初期の値を除いて算出）の関連性を調査するために、全例（n=23）を対象に Spearman 順位相関係数を用いて検討した。</p> <p>3. 結果 疼痛の重症度別での 2 群間の比較では、初期において疼痛重度群における組織間の滑走性が有意に低下し、荷重時痛・伸張時痛・収縮時痛が有意に高い結果となった。全例を対象とした各項目の改善度の相関分析の結果、組織間の滑走性の改善度は荷重時および伸張時の大腿外側部痛と有意な正の相関関係を示した。</p> <p>4. 考察 大腿骨転子部骨折後には、大腿部に腫脹や熱感、皮下出血に伴うことが多い。このような局所病態が結合組織に過度な連結が生じさせ、組織間の滑走性低下が生じると考えられる。さらに荷重時の大腿外側部痛は歩行中の初期接地から荷重応答期に頻発する。この相では大殿筋と外側広筋が同時に活動することで、大腿外側部に伸張ストレスが加わる。つまり、大腿外側部での組織間の滑走性が低下した状態での大殿筋と外側広筋の収縮による伸張ストレスが荷重時の大腿外側部痛に繋がっていると考えられた。</p> <p>5. 結論 術後約 3 週で疼痛が重度な大腿骨転子部骨折例では組織間の滑走性は有意に低下し、また組織間の滑走性の改善率は荷重時痛の改善と関連することが明らかになった。本研究の結果は、大腿骨転子部骨折後の大腿外側部痛の一因として組織間の滑走性に着目する必要性を示した。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・結論の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。